

青木繁の絵画を布良の小谷家から考察する ～ 未発表スケッチを中心に

NPO法人安房文化遺産フォーラム 代表 愛沢 伸雄

1. 青木繁と「小谷喜六方」

1904 (明治 37) 年、青木繁は小谷家に 40 日ほど逗留して、布良でスケッチをはじめ 60 点近くの絵を描いたと後年、福田たねが語っている。絵画『海の幸』はもちろん、『わだつみのいろこの宮』に関わるデッサンも多数あったという。

青木繁が小谷家に逗留していたことを示す根拠は、同年 8 月 22 日付で友人の梅野満雄に宛てた書簡に、青木が「房州富崎村字布良 小谷喜六方」と記した差出住所である。



青木繁書簡 東御市立梅野絵画記念館蔵

この絵手紙形式をとった書簡には、布良のことを、「萬葉にある『女良』だ、すぐ近所に安房神社といふのがある、天豊美命をまつたものだ」「沖は黒潮の流を受けた激しい崎で上古に傳はらない人間の歴史の破片が埋められて居たに相違ない」と記している。

絵手紙の最後には、「今は少々制作中だ、大きい、モデルを澤山つかつて居る、いづれ東京に歸へつてから御覧に入れる迄は黙して居よう。」とあり、『海の幸』を制作中と示唆される。

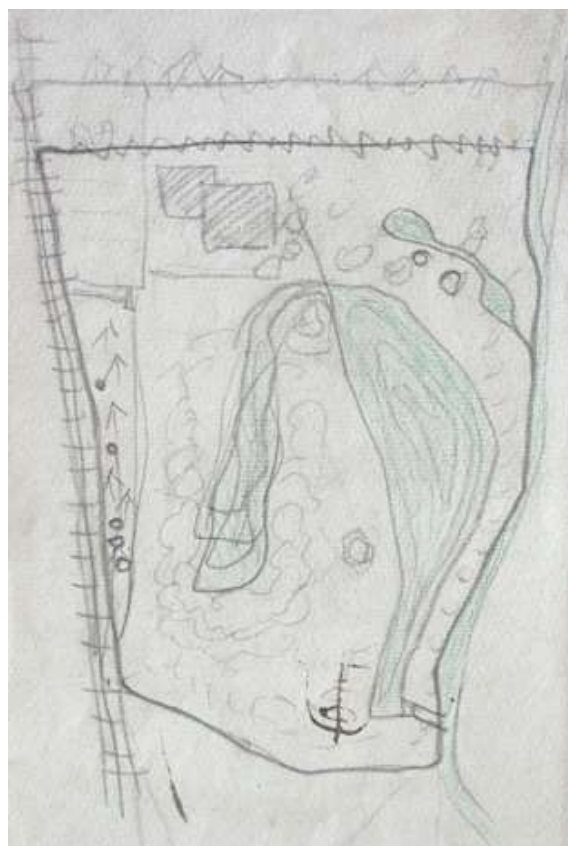
今日まで、青木が小谷家に逗留したという事実は、この書簡と、同行した福田たねや坂本繁二郎、森田恒友の証言から取り上げられてきた。

近年、梅野満雄所蔵の青木繁スケッチ帳の一部が子息の故梅野隆氏の手を離れ、故藤井純一氏に移っている。梅野コレクションだけでなく、藤井コレクションにも、布良で描いた青木のスケッチが多数入っているという。

2. 未発表スケッチ「小谷家周辺略図」

藤井氏は生前、1 枚のスケッチを小谷家と周辺の見取図と推定し、その裏付け調査を依頼してき

た。本当に、明治期の小谷家や周辺の地形を表しているのか。これを「小谷家周辺略図」(以下「青木略図」とする)と称し、限られた資料と照合しながら、描かれた背景を考察してみたい。



青木繁「小谷家周辺略図」藤井コレクション

まず現在の小谷家周辺の地形図 (A) では、小谷家を赤丸にし、現在の主な道路を彩色した。これと、明治期の地形図 2 種を比較検討する。



(A)

次に、1883（明治16）年に陸軍が作成した5万分の1の迅速図（B）である。当該地区の小谷家周辺を拡大して、河川と本道路を彩色し、小谷家は赤丸とした。



(B)拡大

小谷家周辺の地形などは現状と全く異なるが、布良を通過している旧道は大部分が今も残っており、現在の急坂は「青木略図」では階段状に描かれている。

2つめは、前年の1882（明治15）年に作成された絵地図（C）であり、布良村惣代人神田吉右衛門の名がある。小谷家周辺の様子が簡略に描かれている。



(C)

「神田家文書」 館山市立博物館蔵

(B) (C) 両図は、明治期に青木が布良に来た当時の姿と想定してもよいであろう。現在の地図（A）との大きな違いは、繰り返し起きた暴風雨や大火による住宅地や道路などの改変、関東大震災による土地隆起、漁港整備、河川の変更などを経て、小谷家周辺も大きく様相を変えている。そこで、関東大震災前の姿をはっきりさせるために、絵地図（C）の小谷家周辺を拡大してみた。



(C)拡大

3. 青木繁と「巖島神社」

(A) (B) (C) の各図のなかの主な地形を比較しながら「青木略図」を重ねて、構成略図（D）を作成してみた。絵地図であるため、現在の地形図と面積では不正確かもしれないが、「青木略図」がどこを指しているか判明した。



(D)

ピンクで描いたバス通りは後に作られたものであり、現在の小谷家入口（坂道）はなかった。明治期、小谷家の敷地に入るには、旧道を南から北に進み、左手に向区の共同墓地を見て、階段状になっていたと思われる急坂を下る。右にカーブした先の五差路を右折して路地に入り、クランクの先にある石塀の門を入ると小谷家である。

なお、絵地図（C）に鳥居が2つ記されており、大きい敷地は布良崎神社である。もう1つは、その南に鳥居と神社敷地が描かれているが、現在の

地形図 (A) にはない。また、布良崎神社と小谷家の間には河川があり、現在ある宿泊施設「安房自然村」の谷間から流れ出て、海に注いでいる。



(E)

「神田家文書」より 館山市立博物館蔵

ここで、1874 (明治7) 年作成の布良村字切図 (E) を紹介する。絵地図 (C) の8年前であり、布良村戸長豊崎藤右衛門らの名がある

このなかの小谷家周辺を拡大すると、前述の不明だった神社名が「巖島神社」だとわかり、「青木略図」のなかで山のように描かれていた大部分のところが、「巖島神社」の敷地と思われる。



(E)拡大

絵図 (C) をみると、階段状になった急坂のほどに鳥居があり、「青木略図」では急坂に沿って丸印が5つ描かれている。それが何を表しているかは不明である。

また、絵図 (E) には墓地や神社が記され、小谷家から海岸に向かった先の字鯨山には、「龍神社」や「稲荷社」がある。現在の地図 (A) には「巖島神社」「龍神社」「稲荷社」はどれも記載されていない。明治15年作成の絵地図 (C) にも、この2つの神社は見あたらない。

「龍神社」と記された位置の近くには、現在「駒ヶ崎神社」があり、「稲荷社」と記された近くには現在「御染弁天」がある。当時の2つの神社の場所とほぼ重なるので、何らかの事情があって現在の姿になったのではないかとと思われる。今のところ、その経緯は不明である。

4. 「青木略図」から見えること

構成略図 (D) を検討し、「青木略図」から小谷家周辺を考えてみたい。

現在の国道410号は、戦後に建設されたものである。戦前は、小谷家と布良崎神社の間の道路がバス通りであった。この道路を建設する時に、「青木略図」に書かれていた山を削って、その土砂で河川の一部を埋め、水路を変えるとともに道路にしていたものと考えられる。

布良崎神社と小谷家の間、つまり小谷家の北側には深い谷間があり、かつては入江であったような地形である。「青木略図」はこうした土地改変前のものであり、この谷間に川が流れ込み、そこから水が引き入れられて、小谷家の敷地には池と思われるものが描かれている。

さらに、小谷家住宅が明らかに分棟型であった様子も描かれている。今回の小谷家住宅修復事業では分棟型を示す礎石が出土しており、安房の漁村に特徴的な「タキバ型」の分棟型民家とされる。

(日塔和彦論文 P.53 参照)

さて、前述の絵地図 (E) から、小谷家のすぐ南側の小高い山に巖島神社があったことがわかった。このことから、「青木略図」が描かれた背景には、何らかの意図があったのではないかと考えられる。青木繁は元来、神話に造詣が深い。小谷家周辺に多く存在する神社の祭神など由緒についても、小谷喜録からじっくり話を聞いたであろう。そして、「巖島神社」の神域をスケッチ帳に記録したものが「青木略図」と考えられる。地元根づいた神話や伝承に引き込まれたことが、40日もの逗留となった理由のひとつではないかと想像する。

青木繁が布良に来た目的については、後年、坂本繁二郎が次のように語っている。

「青木には、秋の白馬会展を目ざして、日本の古典からヒントを得た『海の幸』『山の幸』の二部作をものにする野心が、初めからあったようだ」

青木は東京美術学校に入ったころから図書館に通い、『古事記』など神話や古代の歴史・文化・伝承を学んでいたことは有名な話である。1903 (明治36) 年、白馬会第8回展に出品し、学生ながら第1回白馬賞を受賞したことで注目されていた。新進気鋭の青木が、第9回展にどんな作

品を出すかは関心もたれてはいたはずである。卒業直後の写生旅行は、間近に迫った展覧会のため、意気込みをもって布良へやってきたのであろう。

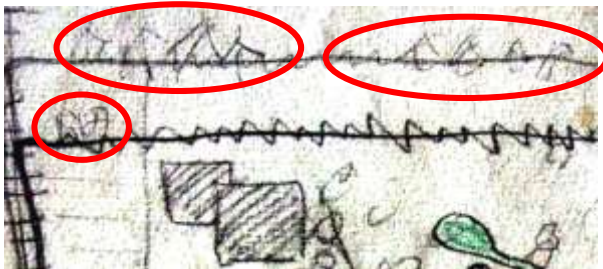
同郷の詩人高島泉郷（字朗）から、布良の海原をイメージする詩を聴き、また森田恒友からも入学後の写生旅行で行った布良のことを聞いたはずである。『古事記』にある「綿津見命」「豊玉姫」「海幸彦」「山幸彦」など海に関わる神話を題材に、絵画化しようとして構想していたのである。

実際、青木は布良の地理や歴史を知るために、安房神社などを調査している。梅野満雄への書簡でも、「官幣大社で、天豊美命をまつた」神社と述べている。後に、青木は「豊玉姫を祭れる官幣大社」である安房神社で宝物を見た『国民新聞』に発表している。具体的な話を聞くために、それなりの関係者をさがしていたと思われる。

つまり、ねらいをもってやって来た青木繁が、柏屋や医師の紹介だけで、40日も小谷喜録宅に逗留したとは思えない。そこで「青木略図」が重要な意味をもっているかと判断した。

5. 「青木略図」が描かれた意図

「青木略図」データを拡大し、丁寧に分析したところ文字（漢字）らしきものが浮かんだ。



「青木略図」拡大

まず「畑」という漢字ははっきりと確認できた。次に、青木繁の書簡と似た字体で「命」や「氏」があった。小谷家北側の谷間は、2本の波線で描かれたとみるが、その波線と文字らしきものが重なっているので、殴り書きのような漢字が判読しにくい。しかし大胆な仮説を試みるなら、上部の波線のなかには「大海祇命」「小谷氏邸」という漢字が書かれていると推察できる。

「大海祇命」（おおわだつみのみこと）とすると、青木がねらっていた『古事記』の神話世界を絵画化するために、「青木略図」のなかに小谷家や「巖島神社」のことを描く必要があったのではないかと推察される。

「青木略図」には絵図（C）にある鳥居のマークや神社を明示するものはないものの、神社の杜や磐座のような雰囲気は感じられる。絵地図（E）から8年後の絵地図（C）には、「巖島神社」の位置に鳥居のマークがあるが、「龍神社」と「稲荷社」は描かれていない。

布良の公的な資料に「巖島神社」や「龍神社」などの記載があるか、また現在の小谷家において何らかの痕跡はないかを調査してみた。

その1つが明治期の公文書、『明治十六年一月現在 安房國安房郡布良村々誌 安房郡布良村』である。1884（明治17）年、布良村戸長 石井嘉右衛門が郡役所に提出した20余頁の村誌で、「神社」の項には、布良崎神社について「祭神天富命金山彦命健速須佐之男命其境内末社ニ存スル安波神社稲荷神社浅間神社琴平神社大山祇神社住吉神稲倉魂神木花咲屋姫神大物主命大山祇神ヲ合祀シテ毎年八月一日ヨリ同三日間ヲ祭日」とあり、「元禄十六年十一月二十三日關東大地震…明治九年十一月十一日村内又大火災ニ罹リ社殿攝末社並ニ神庫等殘ラス焼失…明治十三年七月三日暴風俄ニ起リ殿宇又潰滅」「攝末社新榮ノ經畫ヲナスニ至ルト云爾境外末社本村字鯨山ニアリ海祇神社祭神綿津海命」「境外末社居村字古敷ニアリ巖嶋神社祭神市杵島姫命」とある。

1880（明治13）年、暴風によって布良村字鯨山にあった「龍神社」は「潰滅」したと思われ、後に布良崎神社とともに再建し、「海祇神社」として「攝末社新榮」されたと推察される。「龍神社」の祭神は「大海祇命」なので、「海祇神社」になったかもしれない。

かつて富崎村古文書保存会が作成したガリ版刷り史料には、前年の1879（明治12）年作成の文書が掲載されており、「布良崎神社」「龍神社」「巖島神社」と併記されている。



今回、小谷家の神棚を調査したところ、「巖島海祇両宮神璽」と記された御札が見つかった。字鯨山にあった「龍神社」は被災後、どこかに移転したと思われていたが、「巖島神社」の敷地に「龍神社」の祭神「大海祇命（綿津海命・大海澄神）」を移して「海祇（わだつみ）神社」としたのではないかと推察できる。

1896（明治29）年の村公文書には、布良崎神社再建積立金をはじめ「巖島神社」「海祇神社」本殿建築料に資金を付けた旨の記載がある。布良崎神社社殿再建基金は、1899（明治32）年から8年間にわたり、全村民が懸命に貯蓄に励んで、1908（明治41）年に社殿を竣工したという。その年には、郷社布良崎神社の攝末社無格社「海祇神社」が、布良字鯨山を住所に神社財産の登録申請がなされている。「青木略図」が描かれた1904（明治37）年には、「海祇神社」「巖島神社」ともに小谷家南側の山の部分にあった可能性がある。さらにその裏山は女神山という。

前述の坂本の弁によれば、青木には神話世界の二部作を創作するねらいがあったという。『海の幸』については、8月1日から3日までは布良崎神社の祭礼があり、女装した漁師たちが神輿を担いで海に入る勇壮な「お浜出」（浜降神事）を見たことがイメージソースになったことは、その下絵から明らかになっている。

一方、『わだつみのいろこの宮』の構想については、布良で海女メガネを借りて海に潜ってから、3年がかりで制作したと、青木自身が『国民新聞』で発表している。福田たねも、「青木は海をテーマにして、布良海岸の海女たちや漁師などをモデルに、スケッチなど60枚近くの絵を描いた」と証言している。青木も自ら潜って海中世界を眺め、一段とその構想を深めていったのである。

しかしそれだけではなく、布良に祀られた祭神と、海女たちが潜水採取する姿が、具体的な想像に膨らみ、女神や海神の龍宮、山幸彦や豊玉姫の作品が生まれていったのではないだろうか。「青木略図」は、その構想において重要な意味をもつものと考えられる。

6. 小谷喜録と日箇原繁

マグロはえ縄漁で栄えていた布良では、海難事

故が絶えず、小谷喜録は帝国水難救済会布良救難所の看守長でもあった。「板子一枚下は地獄」といわれ、漁労は常に死と隣り合わせであった。漁師や海女たちは、信仰や祭礼を心の拠りどころとし、日々を生きていた。

机上で神話や古代の歴史・文化を学んできた青木繁にとって、海とともに生きる人びとの姿は、それまで抱いていたイメージとは異なり、その現実を目の当たりにして驚いたであろう。

『海の幸』は、こうして漁村の生活文化のなかに身を置き、青木が感じた想いが滲み出ている。それは、神話世界であるとともに、労働する人間への賛歌を描いたのではないだろうか。天才といわれる青木繁であるが、地元の人びとと交わり、布良の歴史・文化に触れることにより、はじめて美術史上の傑作が生まれたのだといえよう。

その核となった人物が、小谷喜録であった。青木書簡には「小谷喜六」とあるが、当主の正しい名は「喜録」である。

その喜録が「青木繁」という画家の存在を知っていた可能性が、このたび見つかった。



喜録の妻マスは、富崎村長石井嘉右衛門の娘である。その実家の系図（過去帳）によると、マスの妹タミは「本郷区湯島切通坂町十九番地」の日箇原繁という人物に嫁ぎ、1925（大正14）年7月25日に46歳で亡くなっている。

日箇原繁を調べていくと、1905（明治38）年に発行された『月刊スケッチ』の発行兼編集人であり、その奥付に記載された住所がタミの婚姻先と同じであることが判明した。

『月刊スケッチ』は、青木繁の師である黒田清輝や白馬会所属の画家たち、そして著名な文学者らが執筆者となり、文学と美術を繋ぐ雑誌として発刊されたが、1年で廃刊になっている。日箇原という人物は、画報社という出版社と関係があり、美術雑誌や書籍の発行人として名があったものの、詳しいことは不明である。

小谷喜録は義弟の日箇原を通じて、青木繁が東京美術学校の学生で第1回白馬会賞の受賞者だ

と知っていた可能性も十分考えられる。

当時、喜録は小学校教員から村会議員になっている。さらに、布良でただ一人の大日本水産会会員として、義父である村長石井嘉右衛門、後に村長となる神田吉右衛門や満井武平などとともに、水産業で大きな役割を担っていた。

そればかりでなく、俳号「亀六」を名乗って俳句を嗜み、当時の著名な俳人角田竹冷などとも交流があったことがわかってきた。文化的な活動をおこない、布良のなかでも、芸術・文化にはとくに理解が深い人物であったと思われる。



7. 日露戦争における布良

青木繁が小谷家に逗留した1904(明治37)年は日露戦争が始まっている。その前年に開設された帝国水難救済会布良救難所は、海上警察的な役割を担っており、その看守長という重職にあった小谷喜録は、かなり多忙な日々を過ごしていた。



明治に入り、帝都や横須賀軍港の防御として、1880(明治13)年から東京湾要塞建設が始まった。その要衝である布良では、1889(明治22)年に阿由戸浜そばの鳶巢(とびのす)という小高い山上の台地に海軍望楼が設置された。ここでは、海上の艦船の見張りや気象観測、また艦船遭難や水難への対応、さらには電信や電報を扱っていた。布良は軍事演習の地でもあり、望楼を攻撃する仮想訓練もおこなわれていた。

当時、館山湾では海軍艦艇により、大房岬の断崖を標的にした艦載砲の射撃訓練が実施されており、日露戦争での日本海海戦ではバルチック艦

隊を壊滅させる要因となったともいわれる。

軍事戦略的な拠点である東京湾口部に置かれた布良救難所は、民間の顔をもち、軍に協力する機関として、とくに戦時情報を的確に流す役割があった。東京朝日新聞の記事は、布良救難所から発信された電文であり、その内容は「南方から砲撃なり開戦ならん」というものであった。これは、ロシアのウラジオストック艦隊が布良沖まで来た危機的状況を伝えている。

この艦隊が英国やドイツの輸送船を沈めた際には、砲撃音が布良でも聞こえたという。当時、青木らもその砲撃音を聞いたはずであるが、梅野満雄宛の書簡には何も記されていない。これは、小谷喜録が布良救難所看守長であったことに配慮したのかもしれない。



「帝国水難救済会50年史」より

余談であるが、小谷家からは多くの書画が見つかっている。なかには山岡鉄舟などの著名人のものもある。とくに注目すべきは、「韓国李俊鎔」と署名された書である。

李俊鎔(イ・ジュニョン)とは李氏朝鮮末期の王族であり、大韓帝国第26代皇帝高宗の甥にあたる。王位継承の陰謀に巻き込まれ、日本に亡命し、1899年(明治32)年から1907(明治40)年まで北条町(現館山市)に閑居している。鋸山日本寺の仁王門にも、李俊鎔の書による偏額「乾坤山(けんこんざん)」があるが、小谷喜録がこうした人物とも広く関わりがあったことは興味深い。

